# 環境の調和を都市型ランドスケープデザインの中に模索する

Finding the Environmental Balance through Urban Landscape Design

鶴田　景子　*Keiko Tsuruta, ASLA*

WRT プランニング＆デザイン
WRT Planning & Design

## 環境の調和とランドスケープアーキテクト

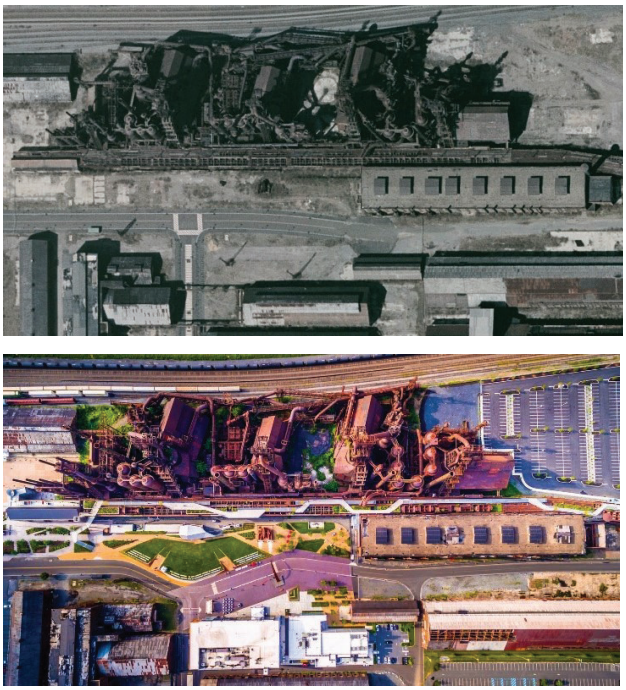
ランドスケープは環境のシステムを促進する場であり，歴史や文化の継承を反映する場であり，そして様々な未来との関係性を構築する場でもある。物心ついてから，ただひたすらに“デザインする”ということに魅せられ，1から10までコントロールすることによって，より完成度の高い作品が出来上がると邁進していた建築家の私。その“コントロールする”ことの延長として，「建築のまわりの“都市”をデザインするために」ぐらいの軽い気持ちで渡米した当時の私は，時に壮大で複雑なプロセスを伴い，未知の可能性をも読み込んでデザインしていくランドスケープの背景にはまだ気づいていなかった。

9/11の事件が未だ生々しかった大学院卒業時，公共スペースの安全性の確保が優先されがちだった当時から16年，ランドスケープデザインの都市における重要性と多様性が徐々に一般にも浸透し，地球温暖化に伴って，気候変動への対応や，生物多様性の保存促進と資源の保全が最前線の課題になりつつある今，ランドスケープ・アーキテクトへの認識は，本来の役割と一般認識との差異がようやく狭まりつつあるように感じる。1966年にIan Mchargによって掲げられたマニフェストに示されたランドスケープの職能と環境の関係は，“都市の領域内でのランドスケープシステムの確立”から，“ランドスケープシステムによる都市の領域の確立”という方向に変換しつつある。また，環境保全や都市の大型再開発といったプランニングや都市計画のプロジェクトにおいても，私たちランドスケープアーキテクトがその旗持ちを担う場面が多く出てきている。

## 場の力を惹き出すということ

建築に携わっている頃から，場所性の持つ力をどのようにデザインに反映できるかということを常に意識しており，土地の風土や風習に然り，歴史，材料，そして使い手に寄り添うデザインとは何か，そういった探求心が自然と私をランドスケープデザインの道へと導いていった気がする。ある一つの建築作品との関わりをきっかけにして，渡米を決意した訳だが，建築デザインの世界で実際に“建てる”という行為をデザインから施工まで一貫して経験した事は，ランドスケープの仕事をする今も，形になるプロジェクトにこだわり続けている私にとって貴重な財産となっている。場所性に寄り添いながら，“創りこむ”という拘りを通して，その場所に新しい命を吹き込む，ベスレヘム・スチール工場跡地の再開発計画は私にとって，マイルストーンとなるプロジェクトで，その後のランドスケープ・アーキテクトとしての方向性を大きく位置付ける経験となる（写真－1）。

何もしないことが一番“真”に近いのではないかという廃墟の持つ圧倒的なパワーを前に，場所に寄り添いうながら，デザインへの思いというものをどう表現していくか，またアメリカにとって経済と社会の両面において歴史的な意味を持つこの場所に，公共空間として新たな命を吹き込むことの重さ，日々葛藤していた。コンペを通してプロジェクトを勝ち取って以来，第1期の広場計画，第2期の高架線公園化計画，そして道路周辺公共空間計画と続き，来年にはまた新たなプロジェ



写真－1　ベスレヘム・スチール工場跡地再開発

クトを控え，私とベスレヘム市との関わりは今後も続いていく。一つのランドスケープの計画を通して再認識された場所性が触媒となり，市全体の復興を連鎖的に導ていく，そんな再開発を必要とする中小の工業都市がアメリカには多く存在し，今，新たにヴァージニアの繊維工場跡地の計画に携わっている（写真－２）。環境，社会，そして経済の必要性に対応しながら，歴史や文化との繋がりをデザインするというプロセスを人々と共有していく，そんな仕事をさせて頂いてると自負している。

写真－２　Dan River Innovation Campus 再開発計画

写真－３　クリーヴランド CHEERS-Walkshop

### プロセスの共有

プロジェクトの大小や場所性に関係なく，そのヴィジョンとプロセスを早い段階でチームはもちろん，クライアントや地域住民と共有することは地域に根付いたサステナブルなプロジェクトを目指す上で不可欠である。日本でも随分と見られるようになったが，現在，ほとんどの仕事は，プロポーザルの段階から地域住民参加のプランが重視され，いかにInclusive で公開的なプロセスを行うかがプロジェクトの成功の指標の一つなる。100 人以上のグループを相手にタウンホール形式で意見交換したり，十数人の市民と机を囲んで，リアルタイムでのデザインフレームワークの作成など，建築デザインをしていた時には考えられないプロセスである。データ分析とリサーチによる膨大な資料の整理，幾重にもわたるクライアント側の関係者グループとの対応，そして，多岐にわたる職能を集めたチームでの協同作業と，私たちが管理するものはそれだけでも複雑極まりないが，さらにそれを地域住民とプロジェクトの始まりから終わりまで段階的に共有していく。情報開示することへの戸惑いを見せるクライアントもまだまだいるが，昨今の DEI（Diversity, Equity and Inclusion）の動きの強まりと共に，公共スペースへの住民参加型計画の需要はさらに高まっていくだろう。今年に入って始まったクリーブランドのプロジェクトも，コロナの影響にも関わらず，様々なメディア手法を使った新しい住民参加の局面を迎えている。Zoom を中心として，小規模のグループに分け，ソーシャル・ディスタンスを保っての Walkshop（写真－３）やスマートフォンを使ったセルフ Walkshop などを通じて，早期から計画的に地域住民との連携システムを構築することを心掛けている。

### New Normal と公共空間

影響力のある Vision を生み出すという創造の作業に加え，昨今の都市環境が受けるストレスが増幅する中で，一つのランドスケープに関わる専門家はさらに多岐にわたり，協同作業は複雑化を極めるとともに，デザインチームを始めとするプロジェクト関係者や地域住民と協同し，多様性のある価値を生み出すプロジェクトへと導いてく私たちの役割は，作曲家と指揮者を兼ねたようなものである。

さらに，今年に入って，コロナの影響による都市におけるオープンスペースの必要性と社会との関係性への見直しが求められる中，先がけていた GREEN NEW DEAL と DEI（Diversity Equity Inclusion）の動きの高まりと相まって，ランドスケープアーキテクトの職能の多様性と影響する領域は広がり続けている。

最後に，この夏，Mind The Gap，という University of Pennsylvania 主催のレクチャーシリーズで話をさせていただいたが，そのうちのスピーカーの一人で私にとっては恩師にもあたる，Ignacio Ossa Bunster がこのように述べている。「私たちが関わるものは全て，その大小関係なく，大きな地球というシステムの一部である。たった一つの木やベンチを都市に配置する行為だって，地球を取り巻く環境との連鎖の一つであるという使命を持って，決して軽んじるものべきではない」。これからを担う若手への最大のエール，そして　私たちにも“今一度気を引き締めよ”といわれているような気がした。

（略歴）
1969 年東京生まれ。芝浦工業大学建築学部建築学科，並びに修士課程修了。竹中工務店東京設計部を経て 2003 年ペンシルヴァニア大学ランドスケープ・アーキテクチャー修士課程修了。NY の Thomas Balsley Associates（現 SWA/Balsley）に勤務の後，WRT Planning & Design（旧 Wallace Roberts & Todd）勤務，現在に至る。2015 年より，同社ランドスケープ部門のプリンシパルを務めている。